

「体育の見方・考え方」につながる保健体育科 教員養成課程学生の運動観に関する基礎的調査 ーダンス運動系に着目してー

柳 瀬 慶 子

A Basic Survey of Health and Physical Education Teacher Training Course Student's
Views on Exercise Leading to 'Viewpoint and Thinking in Physical Education'
: Focusing on Dance Movement Systems

YANASE Keiko

2022 年 11 月 4 日受理

抄 録

本研究は、保健体育科教員養成課程の学生に、ダンスの運動観についてアンケート調査を行い、現在どのような「ダンス観」をもっているのか、その「ダンス観」をもつに至った経緯について明らかにすることを通して、保健体育科教員養成課程の学生に必要な「体育の見方・考え方」についての視座を得ることを目的とした。その結果、学生の多くは「自己表現・伝える」という表面的なダンスの「見方・考え方」に留まっていることが明らかとなった。「ダンス観」をもつに至った経緯については、作品創作や発表というダンス学習のゴールを先取りする学校教育と、ダンスの完成作品を視聴する機会が多いメディアの影響が大きいことが明らかとなった。今後、保健体育科教員養成課程の学生に必要な「ダンス観」を育むためには、「他者になる」というダンスの文化的な価値を体験させ、学生がダンスの教育的意義を感じられるようにすることが重要であると考えられた。

キーワード：「ダンス観」、運動の文化的な価値、教育的意義、自己表現、KJ法

I. 緒言

平成 29 年告示の小学校・中学校の学習指導要領及び平成 30 年告示の高等学校学習指導要領の各教科の目標において、「深い学び」の鍵となる各教科等の「見方・考え方」を働かせて学ぶことが盛り込まれた。文部科学省（2017a,2017b,2018）によると、「見方・考え方」とは、『『どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか』というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である』と述べてい

る。また、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる」と述べられている。

中学校保健体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」（文部科学省,2017b,前掲書）として、育成すべき「知識及び技能」「思考、判断、表現等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力が示されている。ここで示されている「体育の見方・考え方」とは、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適正等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」（文部科学省,2017b,前掲書）である。

生徒が「体育の見方・考え方」を働かせて学ぶということにおいて、その前提として教師が運動やスポーツの本質的な価値や意義を把握することや、授業で扱う各運動における教師自身の「見方・考え方」を明確にしておくことが学習指導において重要であると考えられる。なぜならば、秋田（2000a）は、教師の認知枠組みである「教師の信念」において、「教師個人、あるいはその教師を取り巻く教師文化がどのような授業、教師役割を望ましいと考えるかという授業観、教材観、指導観が、教師の知識使用や思考・行動を規定している」と述べている。また、「授業のあり方は各自がもつ考え方、価値観に規定されていることが信念を対象とする研究により明らかにされてきている」（秋田,1992）と述べている。つまり、生徒の「見方・考え方」を育むという教育的営みは、教師各自がもつ考え方や価値観に大きく影響される。そして、学習内容である各運動に関する知識、つまり授業で取り扱う運動とは何か、その運動をどう捉えているかという運動観をもつことが教師には求められるのである。

教職課程の学生は、実際の授業実践において運動観を形成していくという行為は、まだ大学の模擬授業実践や教育実習という場に限定されている。しかし、学生各自が過去の経験（被教育体験等）を通して、暗黙的にしる既にある運動観をもっていると考えられる。大西ら（2017）は、「現場経験のない学生においても、そこまでの被教育体験を通して持っている素朴概念が既に存在しており、それが教育実践を見る一つの『観』として形成されていると考えることができる」と述べている。また、秋田（2000b）は、「授業に関する知識は、教師になってはじめて獲得するのではなく、自らが生徒として受けてきた授業経験を通して教職に就く前からある程度の知識をもっていることが、他の専門職と異なる、教職の特徴である」と述べ、「過去の経験、また教職課程や現職になってからの行政研修、公開研修で先輩や同僚から、そして自らの授業を通して知識が獲得され、また変更していくと考えられている」という。保健体育科教員を目指す学生が、今現在どのような運動観をもっているのか、またその運動観はどのような影響を受けてもつに至ったのかという把握は、保健体育科教員養成課程の授

業において、教師としての「体育の見方・考え方」を育んでいくために重要な基礎的資料になると考えられる。

そこで本研究は、保健体育科（運動分野）の中から、筆者が授業を担当するダンス運動系を取り上げ、大学の教員養成課程に所属し中学校・高等学校の保健体育科教員免許状取得を目指す受講学生に、ダンスの運動観（以下、「ダンス観」）についてアンケート調査を行い、現在どのような「ダンス観」をもっているのか、その「ダンス観」をもつに至った経緯について明らかにすることを通して、今後保健体育科教育養成課程の学生に必要な「体育の見方・考え方」についての視座を得ることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査データ

本研究では、中学校・高等学校保健体育科教員免許必修科目である大学の「ダンス」授業の受講学生に、あなたが考える「ダンスとは何か？」（問1-1，問1-2）とその「ダンス観」をもつに至った経緯（問2-1，問2-2）について、アンケート調査を行った。アンケート調査は、「ダンス」の第1回授業冒頭に行い、受講生の過去の体験から得た「ダンス観」を調査した。アンケート調査の詳細は以下の通りである。

- ・調査日時：2022年9月15日（木）15時 「ダンス」後期第1回授業
- ・調査場所：静岡県T大学Kキャンパス多目的室
- ・調査対象者：静岡県T大学教育学部「ダンス」（中学校・高等学校保健体育科教員免許必修科目・3年次）受講学生29名（欠席者2名を除く）。
内、5名については小学校教員免許必修科目である「表現運動」を受講済みの学生である。

・調査内容

問1-1. あなたが考える「ダンスとは何か？」について記述してください。一文で表しましょう。

問1-2. 問1-1に関して、詳細な説明を加えてください。

問2-1. 問1-1の「ダンス観」をもつに至った経緯（なぜそう考えたのか）を、自身のダンスに関わる経験等を踏まえて記述してください。一文で表しましょう。

問2-2. 問2-1に関して、詳細な説明を加えてください。（複数回答可）

2. 分析方法

受講学生の「ダンス観」（問1-1）については、回答内容別に回答数を表にまとめる。さらに、受講学生のもつ「ダンス観」をさらに詳細に把握するために、「ダンスとは何か？」に関する詳細説明文（問1-2）の回答を、KJ法（川喜多,1967）で分析する。その際、1つの回答文を、できるだけ文節に分けて分析し詳細を把握する。また、各カテゴリー間で、関連のあるカテゴリーは「-」で結び、順序性のあるカテゴリーは「→」で示し、反対の意味を持つカテゴリーは「⇔」で示すこととする。

現在の「ダンス観」をもつに至った経緯（問2-1）については、問1-1と同様に、

回答内容別に回答数を表にまとめる。そして、今後大学の保健体育科教員養成課程の授業においてどのような「体育の見方・考え方」の修得が必要であるかを見極めるために、回答内容の内、学校教育に関する経緯に着目して、その詳細説明文（問2-2）のみを分類する。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対して、次の内容について調査時に書面と口頭で説明を行い、同意を文書にて得た。内容としては、研究対象データは今後の保健体育科教員養成課程における教育の在り方を研究する目的のみに使用すること、個人を特定するものは一切公開しないこと、調査対象者の回答記述は授業評価とは無関係であること、同意後調査対象者に不都合が生じた場合はいつでも撤回できることを説明した。

Ⅲ. アンケート結果

1. 受講学生の「ダンス観」（問1-1・問1-2）に関するアンケート結果

調査対象者である「ダンス」授業の受講学生29名の「ダンス観」（あなたが考える「ダンスとは何か？」）について、1文で回答を求めた問1-1に関して、回答内容の分類を行った。結果は、表1のようになった。

表1. あなたが考える「ダンスとは何か？」（問1-1）の回答内訳

受講学生の「ダンス観」	回答数（名）
自己表現	8
リズムに乗って踊る運動	7
身体表現、表現方法の1つ	6
楽しみ、身体で他者を楽しませる、身体で他者と関わる娯楽	3
全員が輝けるもの	1
自由	1
心と体を一体とする機会	1
センス	1
パフォーマンス	1

「自己表現」と回答した受講学生が最も多く8名となった。回答内容は、自分自身（自分の思いや考え）を表現するということがダンスであると捉えていた。次に、「リズムに乗って踊る運動」と回答した受講学生が7名いた。リズム（音楽）に乗って体を動かす運動やリズムを体で表現する運動であると捉えていた。3番目に、「身体表現、表現方法の1つ」と回答した受講学生が6名いた。身体で感情等を表現するものという捉えや、ダンスは表現方法の1つであると捉えていた。4番目に、「楽しみ、身体で他者を楽しませる、身体で他者と関わる娯楽」と回答した受講学生が3名いた。国や性別を超えて楽しむことができるや、様々な身体の動きで他者を楽しませることが

できる、身体一つで他者とかがわることができる娯楽と捉えていた。その他、「全員が輝けるもの」「自由」「心と体を一体とする機会」「センス」「パフォーマンス」と捉えている受講学生が1名ずついた。

受講学生のもつ「ダンス観」をさらに詳細に把握するために、問1-2に関する回答をKJ法で分析した。結果は、図1のようになった。

KJ法により、29回答から77項目が抽出され、15カテゴリーに分けられた。

上位カテゴリーから見ると、第1に、【自己表現・伝える】(24項目)が抽出された。ダンスとは、自分自身の感情や考え、意図を表現したり、他者に伝えたりするものであるという記述が見られた。中には、周りの状況から沸き起こる自分の気持ちをダンスで伝える(例：式典→お祝いの気持ち、スポーツの試合→頑張れという気持ちをチャダダンスに乗せて)という他者とのかわりの中で自分の気持ちを捉えて表現するという記述も見られた。

第2に、【身体】(16項目)が抽出された。ダンスとは、全身や身体の一部を使って踊る運動、自分の身体だけで行うものという記述が見られた。中には、「連続した様々な体の動き」や「体を柔軟に使う」といった身体の動きに言及した記述も見られた。

第3に、【リズム】(11項目)が抽出された。音楽に合わせて(時には合わせずに)踊るもの、音楽がなくても呼吸に合わせて踊るものという、音楽や呼吸から捉えたりリズムに合わせて踊ったり、時にはリズムを崩して(自分でアレンジして)踊ったりするという記述が見られた。中には、リズムに合わせるということの内容として、動きの速さやタイミング等のリズム感を挙げている記述も見られた。

第4に、【言葉不要】(5項目)が抽出された。ダンスとは、言葉を使わないもの、言葉で表せないことも表現できるものという記述が見られた。また、言葉を介さない他者とのコミュニケーションという記述も見られた。

第5に、【楽しさ】(4項目)が抽出された。運動者やアイドル等が楽しんで踊るもの、見ている人を楽しませるものという記述が見られた。

第6に、【個人と集団】(3項目)と【パフォーマンス】(3項目)の2つのカテゴリーが抽出された。【個人と集団】では、個人でも集団もできるものという記述が見られた。【パフォーマンス】では、ダンスは魅せるものや、自分をアピールするものという記述が見られた。

第7に、【心と身体】(2項目)、【技能・見た目】(2項目)、【センス・才能】(2項目)の3つのカテゴリーが抽出された。【心と身体】では、心と体を全部使うもの、心と体が一体となるものという記述が見られた。【技能・見た目】では、ダンスは上手い下手は関係がない、他者からの目は気にしないものという記述が見られた。【センス・才能】では、ダンスは得意・不得意があるや、体で表現する才能が必要という記述が見られた。

最下位カテゴリーとしては、【全員が主役】(1項目)、【多様性】(1項目)、【ストレス発散】(1項目)、【自由】(1項目)、【スポーツと異なる迫力】(1項目)が抽出された。【全員が主役】では、ダンスは誰か一人が活躍するというものではなく、一

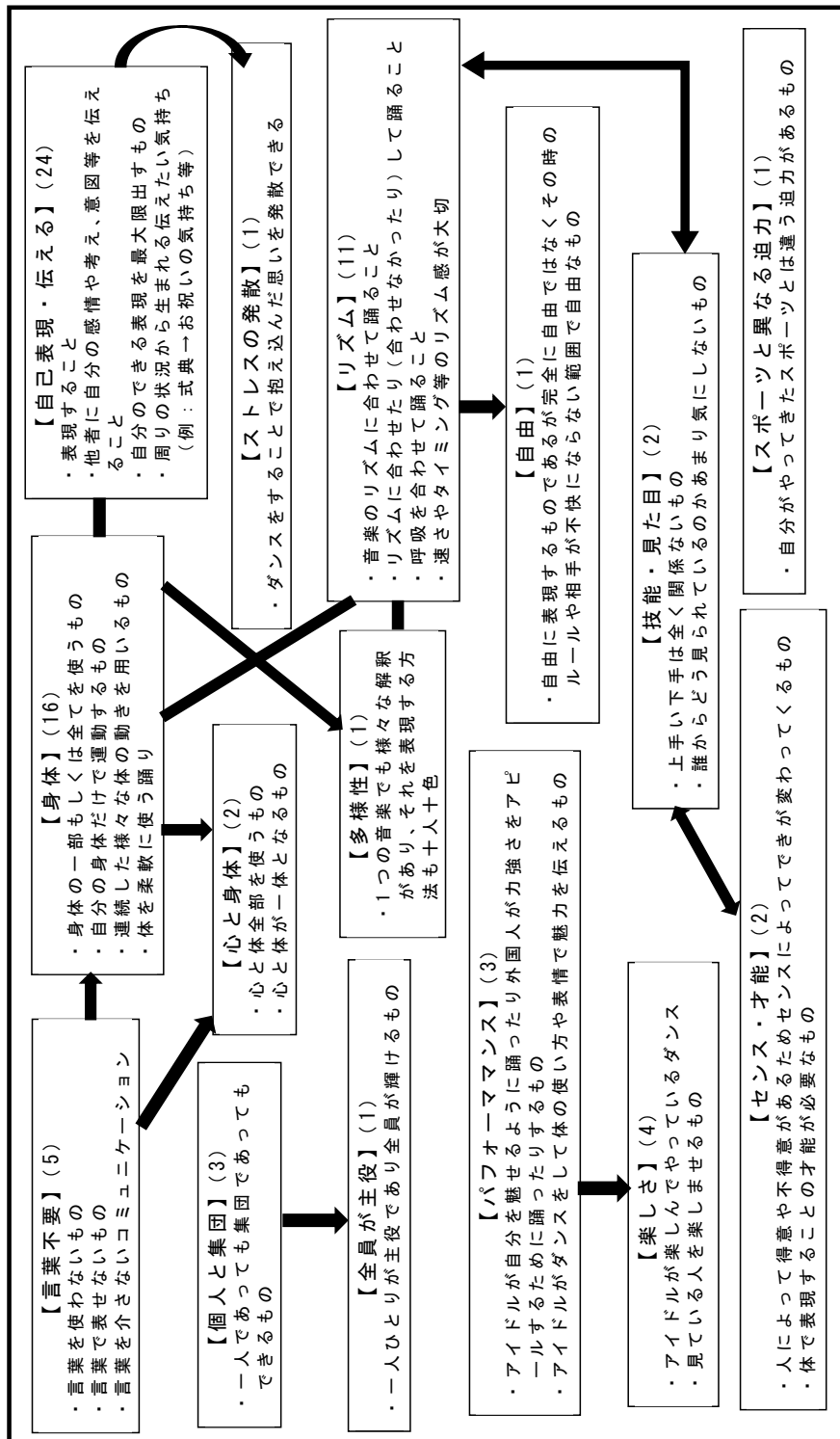


図 1. あなたが考える「ダンスとは何か？」の詳細説明 (問 1-2) に関する KJ 法分析図 () 内は項目数

人ひとりが主役であり全員が輝けるものであるという記述が見られた。【多様性】では、1つの音楽でも様々な解釈があり、それを表現する方法は十人十色という記述が見られた。【ストレス発散】では、ダンスは抱え込んだ思いを発散できるという記述が見られた。【自由】では、ダンスは自由に表現するものであるが、完全に自由ではなく、その時のルールや相手が不快になることはしない等の範囲の中での自由であるという記述が見られた。【スポーツと異なる迫力】では、自分が経験したスポーツとは異なる迫力がダンスにはあるという記述が見られた。

カテゴリー間の関係としては、まずダンスとは、【言葉不要】であるため【身体】で【自己表現・伝える】ということが行われるという解釈のもと、【言葉不要】のカテゴリーから【身体】カテゴリーへという順序性が見られ、【身体】のカテゴリーと【自己表現・伝える】のカテゴリーは関連ありとなった。【言葉不要】のカテゴリーからは、【言葉不要】であるため【心と身体】を使うという、【心と身体】のカテゴリーへの順序性も見出された。

【身体】のカテゴリーからは、ダンスは身体だけでなく【心と身体】も含めたものであるという拡大解釈が見られたため、【心と身体】のカテゴリーへの順序性が見出された。また、【身体】の様々な動かし方が表現方法の【多様性】へとつながると考えられ、【多様性】のカテゴリーへの順序性も見出された。さらに、【身体】を【リズム】に合わせて踊るということから、【リズム】のカテゴリーとも関連があることが見出された。

【自己表現・伝える】のカテゴリーからは、【自己表現・伝える】ことによって、自分の【ストレスの発散】につながると考えられ、【ストレスの発散】への順序性が見出された。

【リズム】のカテゴリーからは、個々の音楽の解釈によって【多様性】につながることから、【多様性】のカテゴリーと関連があることが見出された。また、【リズム】を、拍に規定された音楽のルールと捉えると、ダンスはそのリズム（ルール）の中での【自由】であると解釈し、【自由】のカテゴリーは【リズム】のカテゴリーから一歩進んだ解釈であると考えられることから順序性が見出された。さらに、【リズム】のカテゴリーに見られる動きの速さやタイミング等のリズム感は、【技能・見た目】のカテゴリーの中の上手い下手に関係がないという技能とは異なる内容になるため、【技能・見た目】のカテゴリーとは反対の意味を見出した。

【技能・見た目】のカテゴリーからは、ダンスは人によって得意・不得意があるという【センス・才能】のカテゴリーとも異なる内容になるため、【センス・才能】のカテゴリーとも反対の意味を見出した。

【個人と集団】のカテゴリーからは、ダンスは個人・集団のどちらでも取り組めるものという記述と、【全員が主役】という集団の中にあっても一人ひとりが主役であるという集団の中の個人の在り方に拡大解釈が見られ、【全員が主役】のカテゴリーへの順序性が見出された。

【パフォーマンス】のカテゴリーからは、アイドル等の踊っている運動者の魅力が

アピールされていることを受けて、見ている方が【楽しさ】を受け取っているという流れが見られ、【楽しさ】のカテゴリーへの順序性が見出された。

2. 「ダンス観」をもつに至った経緯（問2-1）に関するアンケート結果

問1-1及び問1-2で回答した「ダンス観」をどのような経緯でもつに至ったかについて、問2-1では、受講学生自身の過去のダンス経験等を踏まえて1文で回答を求め、経緯の内容について分類を行い回答数を表2にまとめた。なお、回答数については、複数回答可となっているため、複数の経緯を記した受講学生が2名いた。

表2. 「ダンス観」をもつに至った経緯（問2-1）の回答内訳

問2-1. 自身のダンスに関わる経験等を踏まえた上での 「ダンス観」をもつに至った経緯	回答数（名） * 複数回答
体育授業や学校行事の経験	12
テレビ・ネット等のメディアを介したアイドルやダンサーの ダンス鑑賞	11
ミュージカル・スポーツ観戦におけるダンス鑑賞	3
鑑賞方法不明（外国人ダンスバトル・アイドルのダンス鑑賞）	2
音楽を聴いて踊りたくなった経験	1
ダンス教室に通った経験	1
日常生活における友だちとのダンス技能の比較	1

最も多かった回答としては、「体育授業や学校行事の経験」（12名）であり、学校教育におけるダンス経験が、受講学生の「ダンス観」に最も影響を与えていることが分かった。次に多かった回答としては、「テレビ・ネット等のメディアを介したアイドルやダンサーのダンス鑑賞」（11名）であった。学校教育と僅差で、メディアとのかかわりの経験が挙げられた。3番目に多かった回答は、「ミュージカル・スポーツ観戦におけるダンス鑑賞」（3名）であった。受講学生の実際のダンス鑑賞が「ダンス観」に影響を与えていた。4番目に多かった回答は、「鑑賞方法不明」であるが、「外国人ダンスバトル・アイドルのダンス鑑賞」（2名）であった。鑑賞方法は、テレビやネット等のメディアであったのか実際に鑑賞したのか、回答からは読み取れないが、何等かの方法でダンスを見た経験が「ダンス観」に影響を与えていた。他の回答としては、受講学生に「音楽を聴いて踊りたくなった経験」（1名）があったり、「ダンス教室に通った経験」（1名）があったり、「日常生活における友だちとのダンス技能の比較」（1名）するような場面に遭遇した際に興味関心がもてず自分にはダンスのセンスがないと感じた経験が「ダンス観」に影響を与えていることが分かった。

今後、大学の保健体育科教員養成課程の授業においてどのような「ダンス観」の修

得が必要であるかを見極めるために、表2の最上位にあがった「体育授業や学校行事の経験」に関する回答のみに着目し、それらの問2-2 詳細説明文の回答を種類別に分類した。結果は、表3のようになった。

表3. 問2-2. 「体育授業や学校行事の経験」の回答内訳

回答種別と主な回答内容	回答数（名） * 複数回答
【中学校・高等学校のダンス授業】 <ul style="list-style-type: none"> ・中学校・高等学校の授業でダンスをグループで考えて発表した。 ・中学校の授業でミュージカルのようなものを自分たちで創作した。 ・中学校の授業で創作ダンス発表の時に、他者の視線を気にせずに取り組めた。 ・中学校の授業で、自分の考えた「楽しい・嬉しい」という思いを最大限に表現することができた。 ・中学校の授業で、ペアダンス、洋楽に合わせて踊る、教師の踊りのまね、創作ダンスを行った。 ・教師が直接教えるのではなく、ビデオのインストラクターを見本に踊った。 	7
【学校行事での発表】 <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の運動会で踊った。 ・中学校の「表現を楽しむ会」という行事で踊った。 ・高等学校の文化祭で踊った。 	3
【大学の授業】 <ul style="list-style-type: none"> ・大学の初等教育課程の授業で心からなりきって体で表現することを楽しみ、普段話さないような他者とかかわることができた。 ・大学の体育関係の授業で、運動やスポーツは遊びであり、ある程度の自由があり、スポーツもダンスもそこで自分の最良のパフォーマンスができるものであると考えた。 	2
【授業でのダンス経験なし】 <ul style="list-style-type: none"> ・授業でダンスの経験がなく、テレビやSNSを観るというかわりしかない。 	1

受講学生の「ダンス観」をもつに至った経緯の中で、「体育授業や学校行事の経験」に着目してその詳細説明の回答内訳を見ると、【中学校・高等学校のダンス授業】の経験が一番多かった。ダンス授業の内容を見ると、授業においてダンスをグループや自分で「考え」て「発表」するという授業内容が多く見られ、作品志向が強い傾向が

伺えた。また、ビデオのインストラクターの動きの真似をさせるだけの授業もあった。次に多かった回答としては、【学校行事での発表】である。運動会や文化祭等で踊った経験が挙げられた。授業での「発表」とは場が異なるが、ダンスは「発表」するものという概念が強く表れる結果となった。3番目に多かった回答としては、【大学の授業】である。ここでの回答は、ダンス以外の他の運動・スポーツ授業を受講して考察した回答や、小学校教員免許必修科目で、既に「表現運動」の授業を受講済みの学生からの回答であった。「楽しさ」や「他者とのかわり」、「自由」というキーワードが挙げられた。1名であったが、【授業でのダンス経験なし】という回答があり、これまでの学校教育でダンスに取り組んできていない実態も見られた。

IV. 考察

表1及び図1の結果から、【自己表現・伝える】という「ダンス観」が最多となっている。【言葉不要】で、【身体】で自分の感情や考え、意図等を他者に伝えるもの、つまりアウトプットするものとする受講生が多く見られた。そこで、自己表現の「自己」とは何かについて見てみると、三浦(1999)は自己意識について「自己を意識するとは他者の目で自分を見るということである」と述べ、「他者の立場に立たなければ、自己というものはありえない」と述べている。さらに、ダンスの発生について「人間は、身体がわけの分からない不気味なものであると認識」し、「人間は自分が自分であることを確かめられずにはいられない存在」であり、「自分が自分であることを知るには、他人にならなければならない」ことから発生していると述べている。つまり、「自己」の成り立ちには「他者関係」が必須であり、「自己表現」とは、単に自分の感情や考え、意図等を身体で他者に伝えるだけに留まらず、身体丸ごとで「他者になってみる」という行為から出発し、その行為によって自分自身に対する関係が深まり、自分という存在を他者に示す行為になっていったと考えられる。ここでいう他者とは人だけに限らず、音楽等のモノも含む他者と考えられる。ダンスの発生において見られたという「神との融合行為」(山田,1987)から考えても分かるように、図1のカテゴリー【個人と集団】にもあるが、個人で踊る場合にも、音楽が流れていたり、表現する対象(イメージ)があったりして、それらも他者に含まれると考えられる。図1のカテゴリーに【リズム】が挙がっているが、これも単に音楽等のリズム合わせて踊るだけでなく、リズムと一体となってリズムに乗ってみることによって、自分のリズムの乗りを発見したり、自分なりの乗りが生まれたりすることが大切であろうと考える。柳瀬(2008b)は、「踊っているということ」に見られる他者関係を、小学校の表現運動の授業分析により明らかにした。そこには、他者に働きかけられたり(受動)、自分なりの表現で働きかけたり(能動)するという「応答関係」が見られた。そうした自分なりの表現が、【多様性】につながっていくのではないかと考える。そして、他者と集団で踊り合っている場合にも、個々の乗りが生み出され、よって【全員が主役】という状態が創られるのではないかと考える。時代が遷り変わり、現代までに様々なダンス文化が生まれてきている。しかし、Margaret N H'Doubler (1994)

によると、どのダンスも「表現する方法が時代によって異なっているだけ」であり、「表現したいという願望・要求だけでなく、コミュニケーションをしたいという願望・要求が、人間を審美的手段の発見に至らせ、その手段の探求から、舞踊の知識・科学および技術が発展した」と述べている。ダンスの発生に留まらず、ダンス文化の変遷においても他者との関係は見られ、他者関係はダンス文化を貫く価値として位置づくるものである。岡野ら（2012）は、『『体育における対話的学び』の三位一体』の中で、「深い学び」に相当するものとして、「運動の中心的なおもしろさ（文化的な価値）」の設定が必要であると述べている。「これは取り上げようとする運動とは『何か（概念）』に相当し、その運動の Authentic（真正な・本物の）なおもしろさを導き出し、単元の主題（テーマ）を設定することである。『リレーとは何か』について歴史的・文化的な視点からひも解き、『リレーの何がおもしろいか』を明確にする作業である」（岡野ら, 2015）と、リレーを例に説明している。つまり、教師は、運動の価値を文化の発生や発展から捉え、時代越えて一貫しているその運動独自の魅力を明確にすることが必要であり、それが生徒の運動に対する「見方・考え方」を働かせることにつながるのである。そのように運動の価値を捉えることにより、そこから教育的意義が生み出されるのである。ダンスは、「他者になる」という文化的な価値を中核として、「他者になる」だけでなく、他者をベースとしながらも自分なりの表現を生み出していくという営みがダンスにおける教育的意義であろうと考える。

このようなダンスの「見方・考え方」から、受講学生の「ダンス観」を考察すると、図1-2の上位カテゴリーである【言葉不要】【身体】【自己表現・伝える】【リズム】からは、特に表面的なダンス理解に留まっていることが伺える。単に、言葉を使わない、身体を動かす、自分の感情等を他者に伝える、リズムに合わせて踊るといった、見たままの物事をダンスとして捉えている現状がある。【言葉不要】の回答の中には、言葉を介さない他者とのコミュニケーションや、【自由】の回答には、ルールや踊り合う相手という他者関係を意識した「ダンス観」があり、【リズム】の回答の中にも音楽に合わせずに踊る（自分でアレンジして踊る）という自分なりの乗りや表現を生み出していくという、ダンスの文化的な価値や教育的意義を踏まえた「ダンス観」をもつ受講学生が少数ではあるが見られる。しかし、大多数は、ダンス文化を貫く「他者関係」の視点が抜け落ちて、ダンスの文化的な価値や教育的意義を見出していないことが分かる。

では、なぜ受講学生の「ダンス観」が表面的な理解に陥ってしまうのかについて考察していくこととする。表2の「ダンス観」をもつに至った経緯を見ると、「体育授業や学校行事の経験」と「テレビ・ネット等のメディアを介したアイドルやダンサーのダンス鑑賞」が大部分を占めている。「テレビ・ネット等のメディアを介したアイドルやダンサーのダンス鑑賞」については、図2のカテゴリー【パフォーマンス】や【全員が主役】と関連が見られ、受講学生の「ダンス観」の構築には、メディアの影響が大きくかわっていることが分かる。秋田（2000a, 前掲書）は、「メディアの時代となり、学校の外との生きた情報が教材となる状況が今後さらに強まると考えられ

る」と述べており、その影響力は年々増していると考えられる。近年メディアにダンスが多く取り上げられ、若者を中心にダンスブームが巻き起こっており、ダンス文化を身近に感じられる等メディアのよい面は多くあると思われる。しかし、テレビやネットから流れるダンスシーンは、実際に自分の身体を通した実感はなく、完成された作品として鑑賞されるため、ダンスの過程で生み出される他者との関係性や自分の気づき等がブラックボックス化しやすいというデメリットも考えられる。そして、テレビやネットに映る完成されたダンスが受講学生のダンスの印象として残り、ダンス授業における作品志向も強まってくるのではないかということも危惧される。図2-1において最多であった「体育授業や学校行事の経験」の回答内容を見ても、ダンスをグループや個人で「考え」て創り、授業や学校行事で「発表」する取り組みが多く見られる。ダンス学習のカリキュラム（文部科学省,2017b, 前掲書）は、「フォークダンス」を除く「創作ダンス」と「現代的なリズムのダンス」は、「即興的に表現すること」や「全身で自由に弾んで踊ること」をねらいとしており、「即興」と「自由」がキーワードとなっている（但し「自由」については、「リズムの特徴を捉え、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って体幹部（重心部）を中心に全身で自由に弾んで踊る」となっており、すべてが「自由」ではなく、あくまでリズムの特徴を捉えながらの「自由」である）。特に、「創作ダンス」においては、「ひと流れの動き」を「即興的に表現すること」が学習の核となり、学習の発展として「変化と起伏のあるひとまとまりの動き」にしてイメージを広げたり深めたりする作品化へと続いていく。ダンスの動き方を「考える」と「即興」とは異なり、またすぐに作品を創るのではなく「創作ダンス」や「現代的なリズムのダンス」では、イメージ（題材等）や音楽のリズム等に規定された中で「自由」に、「即興的」に踊ることを通して、イメージを膨らませたり、リズムに乗ったりする体験が十分に保証されなければならないと考える。そうした運動経験の中で、「イメージになりきる」や「リズムの乗る（リズムと一体となる）」といった、「他者になる」というダンスの文化的な価値に触れることができ、自分なりの表現や乗りが生起すると考えられる。

V. まとめ

本研究は、保健体育科（運動分野）の中からダンス運動系を取り上げ、中学校・高等学校の保健体育科教員免許状取得を目指すダンス授業の受講学生が、現在どのような「ダンス観」をもっているのか、その「ダンス観」をもつに至った経緯について明らかにすることを通して、今後保健体育科教員養成課程の学生に必要な「体育の見方・考え方」についての視座を得ることを目的としてきた。

その結果、受講学生の「ダンス観」としては「自己表現・伝える」といった自分の感情や考え、意図等を他者に伝えるというものが最も多く見られた。しかし、ダンスを文化的な視点から捉えた時、ダンスは「他者になってみる」という行為から出発し、他者になることによって自分自身に対する関係が深まり、自分という存在を他者に示す行為になっていったという文化的変遷があり、そこには他者関係がダンス文化を貫

く価値として見出されるべきであった。そしてダンスは、「他者になる」という文化的価値を中核として、「他者になる」だけでなく、他者をベースとしながらも自分なりの表現を生み出していくという教育的意義を持つ運動であるが、多くの受講学生の「ダンス観」は、見えたものだけを捉えるという表面的な「見方・考え方」に留まっていることが明らかとなった。そうした「ダンス観」をもつに至った経緯については、ダンスを「考え」て「発表」するという作品志向が強く、学習のゴール（作品創作）を先取りする学校教育の影響や、完成されたダンス作品を視聴する機会の多いテレビ・ネット等のメディアの影響が大きいことが分かった。

今後、保健体育科教員養成課程の学生に必要な「ダンス観」を育むためには、文化的価値を十分に盛り込むために、他者との踊り合いの機会を体験させることや、「即興」や「自由」といった自分なりの表現や乗りを出せる余地を活動の中に設ける等して、「他者と踊り合う過程」を自分自身の身体を介して十分味わわせ、受講学生自身がダンスの教育的意義を感じられるようにすることが重要であると考えられた。こうした体験が、保健体育科教員養成課程の学生に必要な「体育の見方・考え方」を育むことにつながると考えられた。

今後の課題としては、本研究はダンス運動系を取り上げたが、他の運動系についても運動の文化的価値を核としながら、運動の教育的意義を見出して学ぶことが必要であることから、同様の視点で、他の運動系についても保健体育科教員養成課程の学生に必要な「体育の見方・考え方」について考察を深めていきたいと考える。

〈引用・参考文献〉

- 秋田喜代美（1992）「教師の知識と思考に関する研究動向」『東京大学教育学部紀要』32：221－232
- 秋田喜代美（2000a）「教師の信念」日本教育工学会編『教育工学事典』pp.194－197
- 秋田喜代美（2000b）「教師の知識」日本教育工学会編『教育工学事典』pp.199－201
- 川喜多二郎（1967）『発想法 創造性開発のために』中公新書
- Margaret N H'Doubler（1994）「舞踊の文化的概観」松本千代栄著『舞踊学原論』大修館書店
- 三浦雅史（1999）『考える身体』NTT 出版 p.36, p.82, pp.92－93
- 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 体育編』東洋館出版社
- 文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 保健体育編』東山書房
- 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 保健体育編 体育編』東山書房
- 岡野昇・山本裕二（2012）「関係論的アプローチによる体育の授業デザイン」『学校教育研究』27：80－92
- 岡野昇・佐藤学（2015）『体育における「学びの共同体」の実践と探求』大修館書店

- 大西宏明・森脇健夫（2017）『『教えること』についての『観』の自覚と変容－2016
年前期科目『教職入門』実践の分析－』『三重大学高等教育研究』23：15－24
- 山田敦子（1987）「ダンスの発展史」岸野雄三編 日本体育協会監修『最新スポーツ大
事典』大修館書店 p.773
- 柳瀬慶子（2008a）『『他者関係の変容』としての表現運動に関する研究』三重大学大
学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修 修士論文
- 柳瀬慶子（2008b）「表現運動の授業における『他者関係』に関する研究」『Reserch
Journal of JAPAN』25：25－37
- 柳瀬慶子（2020）「表現運動・ダンスの学びのデザイン」『体育科教育』大修館書店
68（12）：24－27